

COVID-19 禍での現地開催

木下 利彦 Toshihiko Kinoshita

第117回日本精神神経学会学術総会会長
関西医科大学精神神経科学講座

第117回日本精神神経学会学術総会を2021年9月19日から21日の3日間、国立京都国際会館で開催させていただきました(図1)。新型コロナウイルス感染症の蔓延で当初の6月の予定から3ヵ月の延期後の開催でした。フル企画 on site プラス on demand でのハイブリッド開催としました。関西医科大学主催としましては、1988年前任の斎藤正己先生が大会長で大阪国際交流センターにて開催してから実に33年ぶりでありました。今回のテーマは、「革新と伝統が紡ぐ質の高い精神医学」とさせていただきます、「最新の脳科学の知見」「精神医学を築いた巨人達の足跡」「精神医学と芸術」を3本の柱としてプログラムを構成しました。新型コロナウイルス感染が一旦下火になった時でありましたので、1日平均1,000名の会員に会場に足を運んでいただき、運営側としましては大変うれしく思いました。on demand 配信が11月末に終了し、最終的に8,800名の会員にご参加いただきました。

コロナ禍による甚大な影響は、当然のことながら社会生活全体に未曾有の変化をもたらしております。人類の歴史を眺めてみますと、感染症の大流行後に社会が劇的に変化したり、逆に人間の移動によって感染症が流行したり、相互に関係しあっているようです。14世紀のペストの大流行後のルネサンスの勃興、またルネサンス期の梅毒の流行、16世紀の大航海時代における中南米の天然痘の大流行とその文明の滅亡、19世紀の産業革命と結核の流行、20世紀の世界大戦とスペイン風邪の大流行などが該当すると考えられています。今回の新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、今まで経験したことのない速さであり、一瞬にして全世界に広がりました。社会に及ぼす影響は戦争による被害に比しても甚大なものになっております。また以前はあまり顧みられることのなかった精神医学に及ぼす影響も計り知れないものになっています。グローバルな世界を創成した人類にとって今まで経験したことのない試練であり、本学術総会でも新型コロナウイルス感染症のパンデ



図1 運営に携わったスタッフ一同

ミック後の対応について、10を超えるシンポジウム・教育講演を企画しました。一般演題はすべてe-posterとさせていただきます、379演題の登録でした。

会長講演は「精神科医として40年」と題して、1981年に関西医科大学精神神経科に入局し、精神科医としてちょうど40年歩ませていただいたなかで学んだことを中心に話をさせていただきました。40年前は精神科に対する偏見が強い時代でした。「なぜ精神科医なんかになるのですか?」というような質問を受ける時代でした。この40年間で最も変貌を遂げた科が精神科かもしれません。すべての世代、男女を問わず必要な科になりました。研修医にとっても必修の科目になっています。当然といえば当然の変化ではありますが、当事者としてはこの変化には驚かざるを得ないというのが実感であります。

さて、特別講演は、4演題組ませていただきました。ノーベル賞受賞者の田中耕一先生に「分析・医用機器を用いたアルツハイマー病変の早期検出」をお話ししていただき、新しいがん治療の領域で大変ご高名な小林久隆先生に「がんの光免疫療法」を講演していただきました。3次元のiPS細胞技術を駆使し精神疾患の病態解明に取り組んでおられる岡野栄之先生に「iPS細胞技術を用いた精神・神経疾患の研究」を、最後に政府のCOVID-19対策の責任者であら

れる尾身茂先生には「COVID-19のこれまで、そしてこれから」のご講演を賜り、それぞれの講演から大変示唆に富む有益な情報をいただきました。

次に本学会恒例の「先達に聴く」も4演題を組みました。まずは大御所である西園昌久先生に精神分析家として「時代の変化が精神科医に求めているもの」、小山司先生には薬理的見地から「抗うつ薬の精神薬理—モノアミン仮説の精細化と薬物選択における次元のアプローチ」を、神経生理学的見地から小島卓也先生に「統合失調症の基本障害は主体性の障害」、精神病理学的見地から牛島定信先生に「精神科臨床のなかで50有余年—森田神経質の提唱—」をお話ししていただきました。若い精神科医にはたいへん有益な内容でした。

また、今回は教育講演を44演題と非常に多く設定しました。そのなかの11演題は古典シリーズとして精神医学に貢献した巨人たちに焦点を当てた企画にしました。代表的な教育講演を以下に紹介します。

最新の脳科学の知見としては、神庭重信先生の「精神疾患の多因子性とその臨床的な意味」、松本俊彦先生の「最近の薬物関連精神障害の傾向と対策」、樋口進先生の「ギャンブル障害の実態と対策」、安楽泰孝先生の「脳内に薬剤を効率的に送達するBBB通過型ナノマシンの基礎と応用」、高橋琢哉先生の「シナプス生理学のトランスレーショナルアプローチ」、中澤敬信先生の「iPS細胞技術及びヒト型疾患モデルマウスを用いた精神疾患の分子病態研究」、富田博秋先生の「脳内炎症と精神疾患」などがありました。

精神医学と藝術に関しては、北山修先生の『「あの素晴らしい愛」について—日本の母子像から精神分析的に学ぶ—』、飯森眞喜雄先生の「俳句と短歌を通してみたホモ・ロケンス（喋るヒト）としての統合失調症」、宇高不可思先生の「仏像を診る—癒しの造形に隠された人体現象を探る—」、太田博昭先生の「パリ症候群の今昔」などがありました。

コロナ関連では、高橋晶先生の「新型コロナウイルス感染症・災害に関して精神科に必要な危機管理」、斎藤正彦先生の「COVID-19流行下における精神科病院連携について何をなすべきであったか」などがありました。

古典シリーズでは、加藤敏先生にヴィルヘルム・グリーングァー、古茶大樹先生にクルト・シュナイダー、佐藤晋爾先生にカール・ヤスパース、内海健先生にウジェーヌ・ミンコフスキー、金川英雄先生に呉秀三、渡辺哲夫先生にエミール・クレペリン、河合俊雄先生にカール・グスタフ・ユング、新宮一成先生にジークムント・フロイト、鈴木國文先生にジャック・ラカン、久江洋企先生にエルンスト・クレッチマー、人見一彦先生にオイゲン・ブローラー、本多奈美先生に神谷美恵子をそれぞれ語っていた



図2 Heart Art Contest 2019 審査員特別賞
上松瀬栄蔵氏の作品「いすに座ってパソコンをうつ中田さん」のコングレスバッグ

Heart Art Contestとは…

統合失調症をはじめとする「こころの病」を抱えた方々の趣味や治療を通じて制作された絵画作品のコンテストです。主催団体のご厚意により、「第117回日本精神神経学会学術総会」のメインビジュアルに使用いたしました。

きました。精神医学の礎を築いた先人たちの業績を知ること、若い精神科医にとってかけがえのないものであることを再認識しました。第118回の学術総会にもこの企画が引き継がれるようです。

また、COVID-19のために海外から演者を招聘できませんでしたので、録画の形で12の演題を組みました。数名の海外演者を招待する形が定着していましたが、12名もの多くの演者に講演録画を受諾していただけたことは、逆にCOVID-19のおかげであったかもしれません。

Chad Bousman, Stephen Glatt, John Kane, Chiara Fabri, Alessandro Serretti, Stefan Leucht, Joseph Coyle, Michael First, John Krystal, Colleen Loo, David Mamo, Daniel Muellerの12名の先生にご参加いただきました。

そのほかに、シンポジウムは126演題（委員会シンポジウム34演題を含む）およびワークショップは14演題設定しました。

最後にコングレス・バッグの話をごささせていただきます。図2のように、こころの病を抱えた方々が制作された絵画作品のコンテストHeart Art Contest 2019で、審査員特別賞を受賞された作品をコングレス・バッグに使用させていただきました。多くの会員から「はじめて持ち歩くことができるバッグに出会った」とお褒めの言葉を頂戴しました。